

オンラインリモート

『大乘涅槃経』を読み解く

第1回 2/19金曜

はじめに—私の研究課題—

①東アジア圏に展開された仏性論争・三一権実論争史

②恵心僧都源信(942-1017)の生涯と思想
天台教学の中で捉えていく『往生要集』や『一乗要決』

③中期大乘経典で説かれる如来蔵・仏性思想
→ 草木成仏説・本覚思想といった仏教の日本的展開

④親鸞聖人(1173-1262)と『涅槃経』『華嚴経』
→ 『法華経』無引用の意図など

⑤近代仏教学者(真宗人)である村上専精(1851-1929)
の生涯と真宗観

1. 『涅槃経』の成立

□はじめに

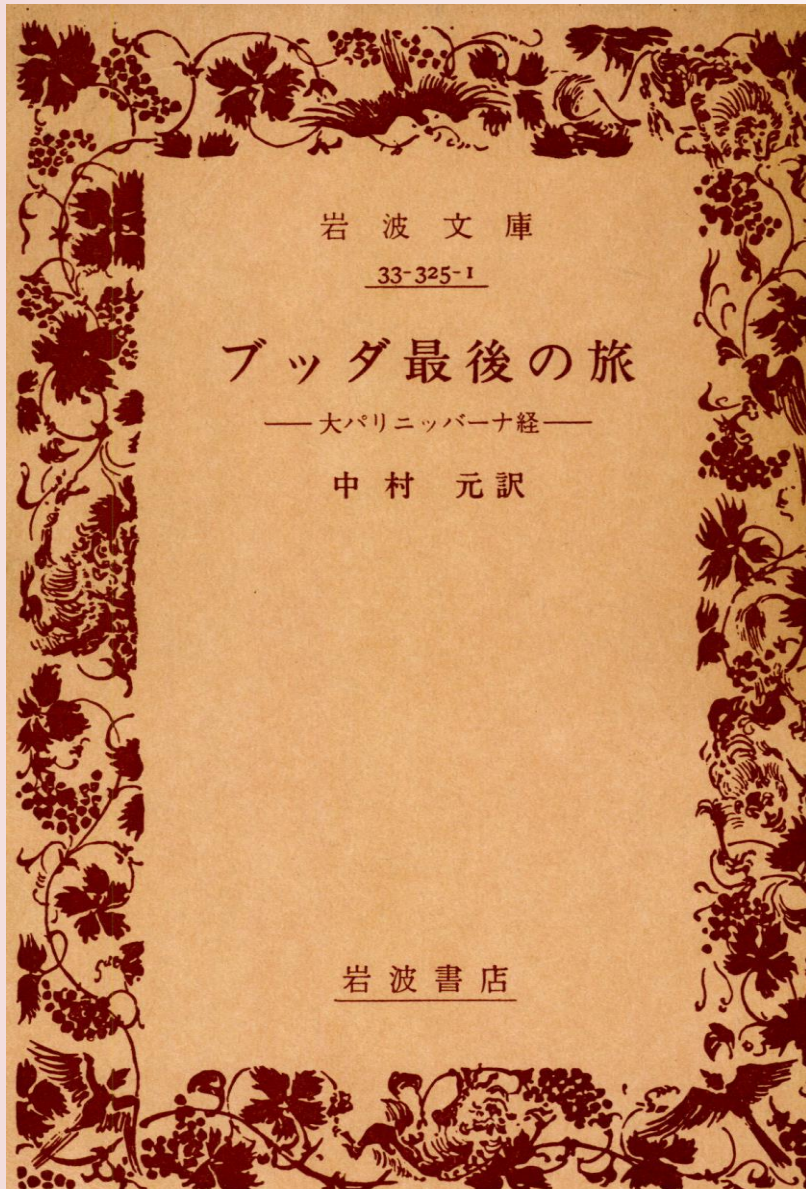
『大乘涅槃経』（以下『涅槃経』）とは、ブツダ釈尊の一日一夜の「涅槃」を説き明かす経典。一般的には『大般涅槃経』（梵語、Mahāparinirvāṇa-sūtra）と呼称されるので、「（仏の）偉大なる完全な涅槃を明かす教え」と訳される。

涅槃とは

◇ブツダ滅後の部派仏教（B.C.3～）では

- a) 「**有余涅槃**」…肉体がまだ残っている状態の涅槃。仏釈尊が菩提樹の下で成道してから入滅するまでの間を示す涅槃。
- b) 「**無余涅槃**」…肉体が無くなった状態の涅槃。肉体と精神（煩惱）が完全に滅した状態であるため、仏釈尊が入滅した時を示す涅槃。

2. 阿含（アーガマ）経典としての『大般涅槃経』



MAHĀPARINIBBĀNA-SUTTANTA

◇漢訳の阿含経典（『長阿含経』）に収録される『遊行経』など『大般涅槃経』（紀元1世紀頃成立）に相当する。

◇南伝のパーリ長部経典

（デーヴァナーリヤ）

3. 大乘經典としての『大般涅槃經』

岩波現代文庫／学術 322

『涅槃經』を 読む

高崎直道

岩波書店

涅槃經

—如来常住と悉有仏性—

横超慧日著

サーラ叢書 26



平樂寺書店

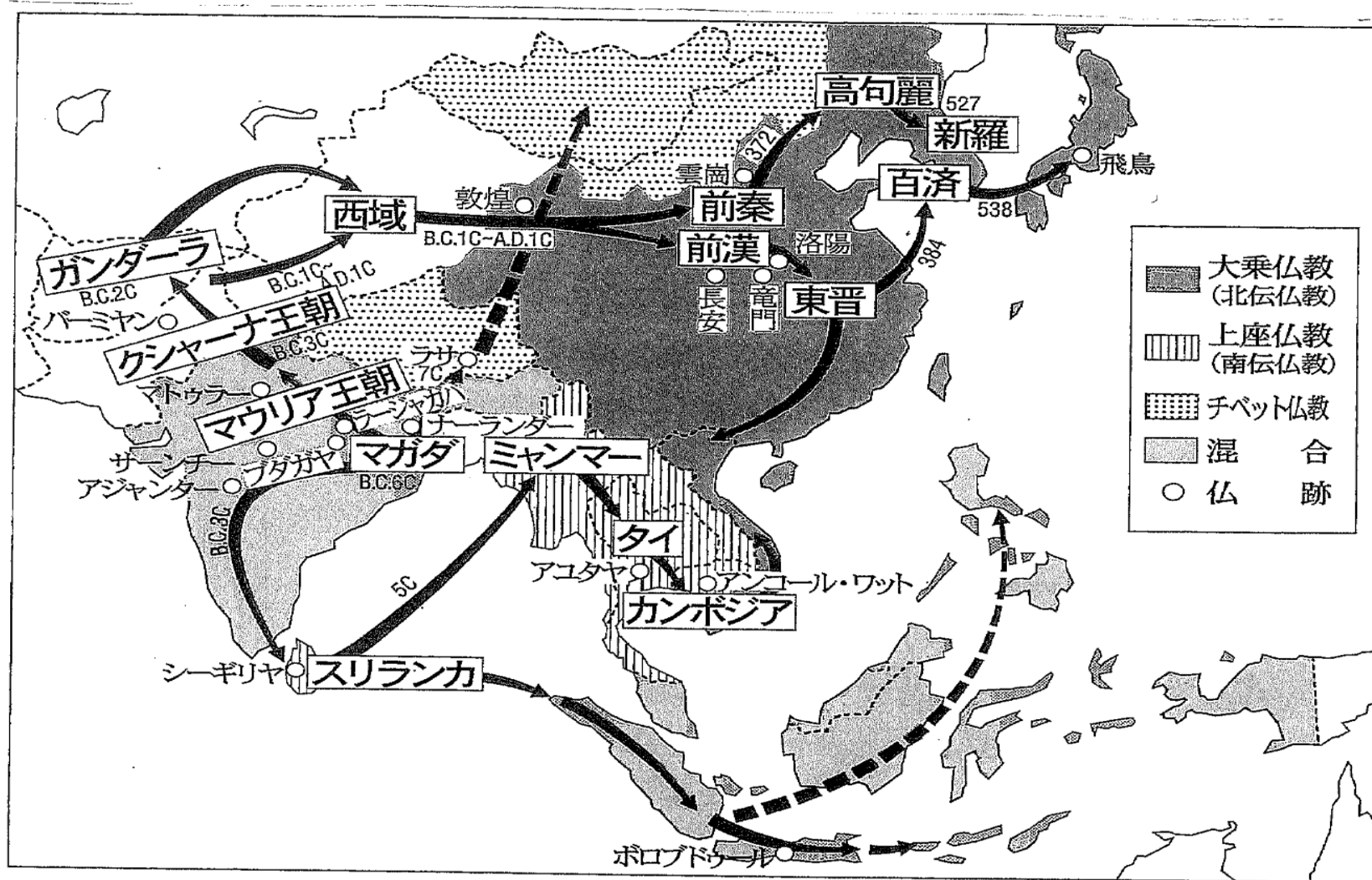
◇漢訳の大乗『涅槃經』

(六卷・四十卷・三十六卷)

◇『大乘涅槃經』(4世紀頃)

※基本的に梵本が現存しない。蔵本は有り。

4. 北伝と南伝から見る『涅槃経』の伝播



アジア諸地域の仏教伝播

5. 『大乗涅槃経』の翻訳者

翻訳	タイトル	翻訳者	翻訳年	巻数・品	特徴
旧	大般泥洹経 (六巻本)	法顕	417年 東晋	6巻18品	チベット訳と対応。 蔵本は9世紀頃に翻訳。
旧	大般涅槃経 (北本)	曇無讖	421年 北凉	40巻13品	大本涅槃経の原型 北朝仏教で依用。
旧	大般涅槃経 (南本)	慧観 慧嚴 謝靈運	436年 劉宋	36巻25品	中国人の手によって科 文・品名が整理された。 天台宗が依用。
新	大般涅槃経後分	若那跋陀 会寧	664～665年 唐	上下2巻5品	上記の3本と異なり、 仏入滅・荼毘の内容。 東アジア撰述の偽経?

⇒本講座では、便宜上「南本」の品名・頁数を用いる。

※「品」とは、「章」のことを示す。

6. 『大乘涅槃經』の構成

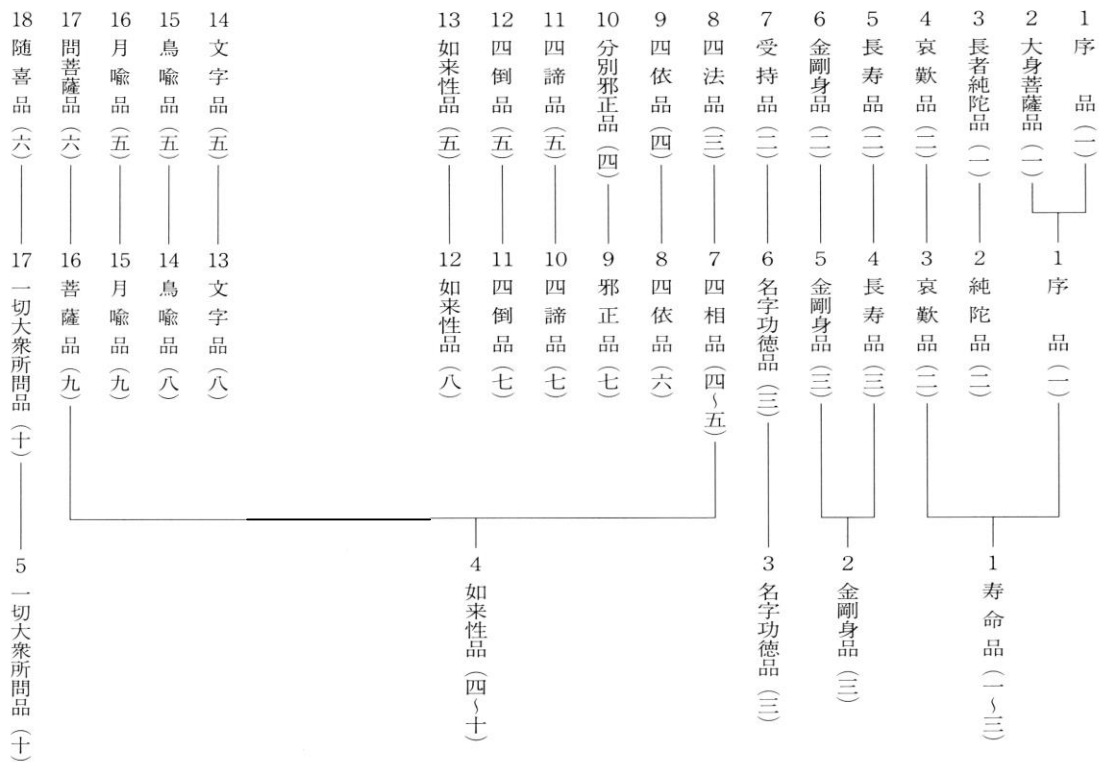
織田頭祐 『天般涅槃經序説』(東本願寺)

涅槃經三本対照表

六卷「泥洹經」

南本「涅槃經」

北本「涅槃經」



後分

中分

初分

第一章 大乘『涅槃經』構造論

- 25 橋陳如品(三十五～三十六) — 13 橋陳如品(三十九～四十)
- 24 迦葉品(三十一～三十四) — 12 迦葉品(三十三～三十八)
- 23 師子吼品(二十五～三十) — 11 師子吼品(二十七～三十二)
- 22 德王品(十九～二十四) — 10 德王品(二十一～二十六)
- 21 嬰兒行品(十八) — 9 嬰兒行品(二十)
- 20 梵行品(十四～十八) — 8 梵行品(十五～二十)
- 19 聖行品(十一～十三) — 7 聖行品(十一～十四)
- 18 現病品(十) — 6 現病品(十一)
- 17 一切大衆所問品(十) — 5 一切大衆所問品(十)
- 16 菩薩品(九) — 4 菩薩品(九)
- 15 月喩品(九) — 3 月喩品(九)
- 14 鳥喩品(八) — 2 鳥喩品(八)
- 13 文字品(八) — 1 文字品(八)

※()は卷数。横超博士作成を一部訂正して掲載。

7-a. 大乘經典の成立①

1. 初期大乘經典（紀元前後～紀元200年頃に成立・翻訳）

經典名	概念・思想
<ul style="list-style-type: none"> ・ 般若經典 （『大品般若經』『小品般若經』『金剛般若經』） ※『般若心經』 	空
<ul style="list-style-type: none"> ・ 『維摩經』 	不二
<ul style="list-style-type: none"> ・ 『華嚴經』（『十地經』『入法界品』） 	法界
<ul style="list-style-type: none"> ・ 『法華經』 	一乘
<ul style="list-style-type: none"> ★ 淨土經典 （『無量壽經』『阿彌陀經』） 	

7-b. 大乘經典の成立②

2. 中期大乘經典（紀元300～600年頃に成立・翻訳）

經典名	概念・思想
・『如来蔵経』『勝鬘経』	如来蔵
・『涅槃経』	仏性
・『解深密経』	阿頼耶識
・『楞伽経』『大乘密厳経』	如来蔵 阿頼耶識

7-c. 大乘經典の成立③

3. 後期大乘經典（紀元600後半～1200年頃に成立・翻訳）

經典名	概念・思想
・『大日經』（胎藏界曼荼羅）	真言
・『金剛頂經』（金剛界曼荼羅）	大呪
・『理趣經』	儀礼
・『蘇悉地經』	顯教⇒ 密教

8. 大乘經典の思想史的課題

成立

初期大乘經典



「仏」とは何か
「法」とは何か

中期大乘經典



「衆生」とは何か

後期大乘經典



「仏」と「衆生」の接点

要点

『涅槃經』は、**衆生**（いのちあるもの）の**問題**に軸を置いた教説であるため、**中期大乘經典**に相当する思想内容となっている。

9. 2種類の『涅槃経』が掲げる主題

(A)…ブッダ最後の説法や旅、そして入滅、入滅後の舎利の分配（舎利八分）、仏塔崇拝など歴史的説示。

=阿含（アーガマ）の『涅槃経』。

(B)…ブッダ（如来）の寿命は永遠であり、全ての衆生には仏に成る本性が有するかといった思想的な説示。

=東アジア圏の仏教思想家が依用した『大乘涅槃経』

(A)の仏説…一人格としてのブッダ釈尊が何を伝えたのかということ課題とする。

(B)の仏説…一人格を越えた仏（如来）が何を説いたのか、何を願ったのかを課題とする。

⇒今回は(B)に基づく『大乘涅槃経』を取り扱う。

10. 『大乘涅槃經』で説かれる主要な用語

- ①「**大般涅槃**」…大乘の究極的な涅槃。単なる歴史上の釈尊の死没でなく、如来として永遠である覚りの内容。
- ②「**如来常住**」…如来とは永遠なる法身(金剛身)であり、現象的存在を離れている＝**法身常住**
- ③「**常楽我淨**」…声聞のために「無常・苦・無我・不淨」の四顛倒を説いてきたことに対して、大乘「**涅槃の四徳**」を公開。
- ④「**仏性**」(buddha-dhātu)…衆生に貫かれる仏になる本性・性質。「**性**」とは生滅因縁といった条件では推し量れない衆生に遍在する道理。＝「**一切衆生悉有仏性**」
- ⑤「**一闍提**」(icchantika)…善根が無い、信を起こさない、善心を生じない、因果を信じない、悪道に趣く存在。